

右肩下がりの文字

角田 健一 (大 壤)

Kenichi (Tajyo) Tsunoda

かねてから、右肩下がり結体を持つ文字はいかにして発生するのだろうか、と疑問に感じ常々潜考してきた。この疑問の出発点は現存する先秦以前の文字に右肩下がりの文字が殆ど見られないこと、そして一方で西周金文の「散氏盤」が右肩下がりの体であったことに起因している。「散氏盤」は言わずと知れた重器だが、この右下がりの体については様々な議論がなされてきた。左手説が根強い中、拙論「散氏盤の特殊性を再考する」(『大東書学』13号)で、この説に若干の問題提起をしてきたが、漠然とした推論を述べるに留まざるを得なかったのは、書道史上を眺めてみても右肩下がりの結体を持つ文字があまりにも僅少で、その根拠を見出すことが困難だったからである。

それからやや時間を経て、先秦を含む漢代以前の右肩下がりの体の一つの要因として「草率」との関連を強く感じるようになった。そのきっかけとなったのが、「銀雀山漢簡」である。

銀雀山漢簡は前漢武帝、元光元年(BC一三四年)の前漢の木竹簡群である。出土は一九七三年で、そのほとんどが書籍であった。『孫子』をはじめとし、それらのテキストと関係の深い内容の簡があること、また書名の知られていない簡が出土し注目をあつめた。未公開の簡もあるが、主な専著に『銀雀山漢墓竹簡』(文物出版社)があり、その大部分を網羅している。なお『簡牘名蹟選11』(二玄社)に未収録の簡の一部に収録しているとあるが、指定の簡はいずれも『銀雀山漢墓竹簡「壹」』に収録されているように思われる。(28頁―29頁↓『銀雀山漢墓竹簡「壹」』所収No九〇〇)(30頁↓『同「壹」』所収No九一一)

書法的側面で見れば、内容が右のような書籍ということもあって、原則的には慎重かつ丁寧に書かれた簡が多い。西林昭一氏は以下のように書風を三分類する。

書体は隸書。ただし書き手は複数である。やや肉厚で闊達な②

(孫臏)、少しく改った気味で斉整な①(孫子)・⑥(晏子春秋)、
右肩下がりの気味で草草風の点画もまじえる③(六韜)・⑤(管子)・⑦(墨子)がある。(前掲『簡牘名蹟選II』70頁)※()
内は稿者補足

また張会「銀雀山漢簡字形与漢字發展源流論」(『古漢語研究』二〇一〇・第二期)は「書体は規整と草率の二類がある」と指摘する。張氏の分類に補足するならば、やや右上がりの結体を要する簡と右下がりの結体を要する簡の二種である。『銀雀山漢墓竹簡「壹」』所収の『孫臏』、『晏子春秋』、『尉繚子』における簡(A)は、やや右上がりの結体で字形も整っているが、一方で『六韜』、『守法守令等十三篇』の簡(B)は極端に右下がりの結体で、かつ草率である。今挙げた二種は比較すると根本から書きぶりが異なる。

とりわけ「銀雀山漢簡」の文字資料は、書体変遷上の考察に一部取り上げられるケースを除けば、その書体に焦点を当てる先行論文は決して多くない。ただ殊に興味深いのは、極めて近い時期にこれら二種の書きぶりが混在している点にある。前者(A)の簡は比較的この時期の漢簡に類似したものがいくつか見られるが、(B)の類は多くはみられない。

この二類は同じ一号墓から出土し、共に内容が書籍という条件下である。したがってこれら異なった書きぶりの混在は、少なくとも

同時に二種の書体・書風が流通していたと考えて差し支えないだろう。

今、簡単に思いつく右下がりの結体を有する書跡を挙げれば、「里耶秦簡」、「謝家橋前漢」、「虎溪山前漢簡」などあるが、例えば「月(肉)」部の横画は総じて点状化が見られ、早書き・草率の共通点がある。図版の「里耶秦簡」は比較的丁寧に書かれた簡と、そうでない簡を各々取り上げたが、丁寧に書かれた①の簡は、②の簡よりも水平が意識されていながらも「月(肉)」部に限らず草率の風が散見される。ちなみに「銀雀山漢簡」の右肩上がりの結体を持つ(A)類にはこの種の点状化は一切見られないばかりでなく、例えば「也」字のように(A)(B)それぞれで文字構造そのものが異なる文字もある。

「里耶秦簡」①



「里耶秦簡」②



「謝家橋前漢」



「虎溪山前漢簡」



「銀雀山漢簡」 「也」 字

也	599	也	614	也	623	也	626	也	630
也	639	也	641	也	678	也	714	也	719

※右肩上がりの体(右)と右肩下がりの体(左)

『銀雀山漢簡文字篇』より転載

前掲「散氏盤の特殊性を再考する」では、「散氏盤」の右肩下がりの原因として日常書写体の影響を挙げた。その時点では具体性に乏しかったが、右の如く「草率」な肉筆文字との整合性によって一端の根拠にはなり得ると考えている。西周とは時代差があり、極論としてはやや弱いだが、それでもなお、楷書を知らぬ古代人の日常書写に現れる右肩下がりの体は草率、早書きの際に現れる一種の風に

は違わないだろうと考える。

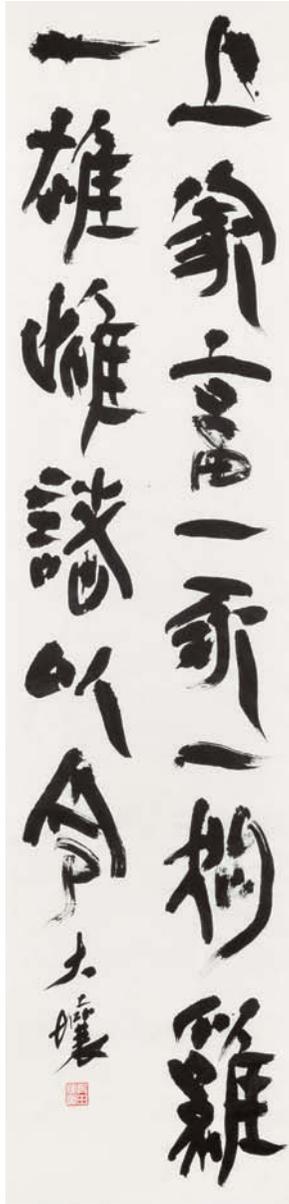
現在私たちは、一般的には横画の右上がりや一定以上強くなると、草率や粗雑なイメージも強く感じる者が多いはずである。これは日頃から楷書や行書を書き、書類の多くが活字で水平であることにも起因しようが、いずれにしても古代人と我々現代人との感覚差は計り知れない。

また右肩下がりの体の出現は、これらに加えて書写環境や書写方法が影響しないとも限らない。今後も注視していきたい。

稚作は、普段使いた道具を使用し「銀雀山漢簡」の右肩下がりの簡の特徴を取り入れた。なるべくこの簡の持つ要素を排除せず、作品としてまとめたかったが、結果このようなものになった。

釈文 上家畜一豕一狗鷄一雄雌諸以令（「銀雀山漢簡」守法守令等十三篇の一節）

サイズ 一六〇×四〇cm



上家畜一豕一狗一雞一雄雌諸以令

160×40cm